

日本の企業文化に即した経営を

副代表幹事
国際関係委員会 委員長
朝田 照男
丸紅
取締役会長



最近気になるのは、企業経営を取り巻く環境が短期的視点に偏りがちになってきていることである。

背景の一つとして、国際情勢についての予見可能性の低下がある。特にここ数年は「戦後レジームをリセット」しようとする力が働き始めているのではないかと感じている。例えば、ヒト、モノ、カネのグローバルな移動が世界経済を活性化させるという考え方に反感を抱く層が増えている。昨年、英国ではEU離脱、そして米国ではトランプ政権誕生という「二つの大きな決断」が下った。これらの決断がなされた理由の一つは、反グローバリズムの考え方を支持した国民が多数を占めたということである。今年は欧州で多くの主要選挙が予定されており、反EUの勢いが強まる可能性もあることから、目が離せない状況が続く。

もう一つは、会計ルールが複雑化していることである。「会計ビッグバン」により、連結決算や金融商品の時価評価、税効果会計、減損会計などが導入された。会計ルールの統一化や厳密化は必要であるが、四半期ごとに決算を提出し、アナリストや格付機関などの外部のチェックを定期的に受けることになれば、経営が目先の利益を優先するようになり、ともすれば、中長期的な視点に立った戦略的事業が育

ちにくくなる恐れがある。

しかし、こうした不透明な環境にあるからこそ、長期的視点の経営の重要性がますます高まっていると感じる。これはまさに、われわれ日本の経営者がこれまで重視してきた考え方であり、日本的経営の良さを再認識すべき時代が到来したのかもしれない。

コーポレート・ガバナンスにおいては、例えば「独立役員」の定義を見直す必要があるのではないか。日本の企業活動の歴史を振り返ると、高度経済成長を支えたのは官公庁・金融機関であり、他国では例をみない企業間の交流であった。真に現場を理解した上で企業の持続的成長やコンプライアンスの確保に貢献していただける金融機関、大手取引先等の参画を得ることが、企業のガバナンスにとってもプラスとなるはずである。

「三方よし」も世界に誇れる日本の価値観であろう。これは、「売り手」の利益を確保し、「買い手」の利益に貢献し、「社会」の発展にも貢献するというもので、今でいうWin-Winのビジネスのあり方を指している。グローバル・スタンダードが浸透しても引き継がれる日本的経営の良さを、今こそ見直すべきではないかと思う。

No.797 April 2017 経済同友 4

C O N T E N T S

特集 1

座談会

未来を担う人づくりを考える

大学生インターンシップの活用と
望ましい採用のあり方 02

特集 2

2017年度事業計画

13

Close-up提言

社会・経済・市場の
あるべき姿を考えるPT【提言】 17

新産業革命の幕開け ～時代を切り拓く心構え～

Column

巻頭言 朝田 照男
「日本の企業文化に即した経営を」 01

リレートーク 山下 良則
「明るくて生意気」 19

メールボックス
「『内閣官房「総合戦略室」への出向と得たもの」 20

私の思い出写真館 武藤 英二
「西端の二つの港町 長崎&下関」 22

新入会員紹介 21

今月の表紙：シリーズ世界の花
【スイートピー】

イタリア原産。甘い香りを持っていることから Sweet peaと呼ばれます。花の形が今にも飛び立つ蝶のように見えるので、花言葉は「門出」「別離」です。